

聖書:エレミヤ書9章1~11節

説教:見よ、わたしは彼らを精錬して試す

はじめに

事故や病気で愛する人と突然の別れなければならなくなったとき、「涙が涸れるほど泣く」と言うことがあります。エレミヤの場合は、頭が涙のタンクであれば涙が涸れずにいつまでも泣くことができる。自分の目が、水が湧き出す泉のようであれば、昼も夜も泣くことができると言っています。それでエレミヤのことを「涙の預言者」と言う人もいます。どうしてそんなに泣くのか。「娘である私の民が」殺されたから。あの人たちのことを思い出すと涙が止まらない。エレミヤは心優しい人なのかと思って、それで終わりそうですが、ここに少し考えなければならぬ問題があるのです。

1 泣く

1) ワタシの民

今日の箇所をよく見るとまったく同じフレーズが繰り返されているところがあります。今読んだ1節と7節、「娘であるワタシの民」とあるのがわるでしょう。音に出せば同じ「ワタシ」ですが、1節は漢字の「私」で7節はひらがなの「わたし」です。私たちが使っている日本語訳聖書では、ひらがなの「わたし」は神、主を表し、漢字の「私」は人間、この場合はエレミヤのことですが、そういう使い分けをしています。英語の聖書でも、神は大文字のMy、人間は小文字のmyとしているものもあります。とにかくエレミヤも主も「娘であるワタシの娘」と言った。さて、これはどういうことか。ここからどのような恵みに行き着くのか。ともに考えてまいります。

2) だれが：エレミヤか主か

1節と7節のどちらにも「娘であるワタシの民」という同じフレーズですが、1節はエレミヤが語ったところ、7節は主が語ったところ、それぞれ別だと言いました。別だと分かるはつきりとしたしるしがあるのかというと、それはないのです。じゃ、なぜ別だと判断したのか。主はここまでユダの人々の罪を責めてさばきのことばを語ってきました。それがここにきて突然泣き出すというのはちょっと辻褃が合わない。それで1, 2節は、エレミヤが語った。そう考えると自然である。そういうことらしいのです。

確かにそのとおりではある。でも、それだったらもう少しわかりやすく書いてくれたら親切だと思います。ところが聖書では、エレミヤが語ったのか、主が語ったのか、なんとなく曖昧になっている。これはどうしてだろうか。私はそこに引っかかる。

3) だれのために：裏切り者の集まり

そのことはまた後で考えることにして、次に「娘であるワタシの民」はなぜ殺されなければならなかったのか。そのことを見ておきましょう。無実の人々が殺されたので悲しいというのならわかりやすいのですが、どうもそうではない。2節後半。「彼らはみな姦通する者、裏切り者の集まりなのだ。」良いことをした人たちが殺されたのではなく、むしろ反対で「姦通する者」「裏切る者たち」、だれを裏切ったかと言えば主を裏切った人たちです。そういう人たち、それはアッシリアに滅ぼされた北のイスラエルの人たちのことであり、まだ起きてはいないけれど、これから攻めてくるバビロンの手によって殺されていく南ユダ王国の人たち。その人たちのことを指す。それで泣いている。

もちろんエレミヤは、そんな悲惨なことにならないようにと、一生懸命ユダの人たちに主のことばを伝えました。前回の箇所にこうありました。「あなたがたの生き方と行いを改めよ。そうすれば、わたしはあなたがたをこの場所に住まわせる。」(7章2節)ところがどうでしたか。エレミヤが熱心に語れば語るほど人々は腹を立て、エレミヤを迫害して耳を貸しません。かえって、にせ預言者たちが「平安だ、平安だ」と語る耳に心地よいことばばかりを聞こうとして、悔い改めようとしなかった。それで結局、ユダ王国はバビロンによって滅ぼされてしまうのです。

みなさんがエレミヤならどう思いますか。「だからこうなると言ったでしょう。自業自得だ。」自業自得というのは仏教のことばだそうですね。今なら「自己責任」と言って突き放すところでしょうか。ところがエレミヤはそんなことは言わずに、むしろ自分を迫害し、石を投げて殺そうとさえした人たちのために涙を流して悲しむ。なぜか。エレミヤは、お人好しだったということでしょう

か。またまた疑問が出てきましたが、もう少し先に進んでいきましょう。

2 主

1) 精錬して試す

3節の頭にかぎ括弧があつて、ここから先は主ご自身のことばであると示しています。3節から6節、厳しいことばが続きます。とくに5節がすごい。「彼らはそれぞれ、互いに友をだまして、真実を語らない。偽りを語ることを自分の舌に教え、疲れきるまで悪事を働く。」エレミヤが2節後半で「彼らはみな姦通する者、裏切り者の集まり」と言った人たちの姿がこれです。それで主はどうされるのか。

7節。「それゆえ、万軍の主はこう言われる。『見よ、わたしは彼らを精錬して試す。いったい、娘であるわたしの民に対してほかに何ができるだろうか。』」

精錬というのは、金属を溶かしていろいろ混ざっていた不純物を取り除いて純粋なものにすることです。もちろん人間は金属のように溶かすわけにはいかないので、実際には、試練を与えて試練によって不純物を取り除く。これには二つのケースがある。

①信仰者へ

一つ目はすでに信仰を与えられている方。信仰をもっていても苦しみがある。それはなぜなのか。パウロはこう説明している。ロマ書5章3, 4節「苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」苦難、試練によつてもつとすばらしい信仰者に変えられていく。積極的なよい意味での精錬です。これが一つ目。

②悔い改めない者へ

二つ目は反対に信仰者ではない、むしろ神に背き続ける人たちに対して行う精錬です。主のことばによれば「娘であるわたしの民」は、口先では立派なことを語りながら、心の中は悪事でいっぱい主へ背き続けています。当然、主はそのまま見過ごす方ではない。9節。「これらについて、わたしが彼らを罰しないだろうか。——主のことば——このような国に、わたしが復讐しないだろうか。』」

2) 娘であるわたしの民

悪いことをしたらそれ相応の罰を受けなければならない。これが私たちの住んでいる社会の基本原則です。ところが世の中のある一部の人たちは、

悪いことをしていながらなんの罰も受けずに、高い地位に居座っていることがある。それで心ある人たちは、「世の中は不公平だ」と怒るわけです。

その点、神にはえこひいきとか、不公平というものではなくて、悪いことをしたらそれに見合ったように罰を与える。でも私たちは勝手なことを言います。「罰はいやだ。もっと穏やかな方法にしてほしい。」そういう文句に対して主は言われる。「ほかに何ができるだろうか。」神も考えたのです。ほかに方法はないか。でも結論は、ほかに方法はない。それで「彼らを精錬して試す」ことにした。具体的には、罰を与えて復讐することにした。こんなことを言うと、すぐにこんな意見が出てくるでしょう「神は厳しい方だ。」確かにここだけ切り取れば、神は厳しいお方に見えます。ではそれだけなのか。

主はなんとおっしゃいますか。「娘であるわたしの民」とおっしゃっている。自分の子どもだと言っている。親は子どものことをどう思うのでしょうか。どんなに悪いことをしても、どこまでも親は子どものことを心配する。なんとか立ち直って欲しいと願う。これが親の気持ちです。確かに私たちはひどい罪を犯してきました。だれも言い逃れできません。ですから神の怒りとさばきを受けなければならない。しかし、神は私たちを自分の娘である、と言っておられる方でもあります。

最初のところで、1節の泣いているのはだれだろうか、エレミヤなのか主なのか、そういう問題があると仰いました。もちろん直接にはエレミヤが語っていることは確かです。しかし泣いているのはエレミヤだけではない。実は主ご自身も泣いているのではないか。そう思わざるを得ない。そのことはイエスに目を留めることによって明らかになってきます。

3 イエス・キリスト

1) この都のために泣いて (ルカ19:41)

エレミヤの姿は、主イエスの姿に重なってきます。ルカの福音書19章41~44節。「エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それ

は、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。」」

エレミヤ書9章10, 11節と比べてみると、よく似ています。そのまま書き写したと思うくらいです。実際に紀元70年にエルサレムがローマ軍に囲まれ、神殿も焼かれ滅んでいきました。そのことをご存じであったイエスは涙を流して泣きます。どうして泣くのでしょうか。エルサレムは、神のひとり子としてこられたイエスを救い主とは認めず、エルサレムから追い出して十字架で殺しました。それほどひどいことをしたのですから、当然の罰としてエルサレムが崩壊し、人々が殺されていく。自業自得、自己責任で終わりのはず。ところが主は、娘であるわたしの民が苦しんでいくことを黙って見ておられなくて泣くのです。

2) さばきの先にある望み

ではただ泣いて終わりなのでしょうか。そうではない。実は、この後イエスは宮に入られて前回見たように、両替人や鳩を売る者たちを神殿から追い出し、その結果、祭司長や律法学者たちイエスをどうやって殺そうかといきり立っていくのです。イエスは「娘であるわたしの民」が殺されていくことを知って涙を流して、ただそこで終わるのではない。「わたしが彼らを罰しないだろうか」と言われるとき、ご自分がさばかれる者の先頭に立って、十字架でさばきをお受けになる覚悟をしています。

「精錬され、試される」ことはいやなことです。できればあつて欲しくない。しかし、主は言われる。「ほかに何ができるだろうか。」そう考えた結果、十字架に向かわれました。主ご自身が、真っ先に「精錬され、試される」お姿を私たちに示して下さいました。そこで私たちは何を見るのでしょうか。さばきの先にある救いの恵みです。こんな真っ暗な世の中です。それでも、主はここに光があるから、わたしのところへ来て救われなさい。そして今度はあなたが世の光となるのだと招いて下さる。

この主を見上げながらまた前へと踏み出してまいります。